

淀みがつくる交流拠点 広がり制限して表情を与える

指導教員 吉松秀樹教授 印

1BEB2235 大沼 由実

1. 通過するだけのまち

身の回りには様々な形で「流れ」が存在している。その流れのなかには淀みもあり、街のなかの淀みでは各々穏やかな時間が流れていることに気付いた。このような淀みがなく、通過するだけのまちには物足りなさを感じる (Fig.1)。



Fig.1 まちのなかの淀み

2. まちのなかの淀み

時間や人、物事が継続しながら変化をしている様が「流れ」であり、淀みが生まれるところは「遅い」流れの部分である。遅い流れに沿うとやがて停滞する。建築における「流れ」は人の動きである (Fig.2)。

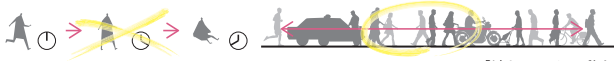


Fig.2 「流れ」=人の動き

街のなかの淀みを直線の流れの両脇や凹んだところ、曲がる場所に見つけた (Fig.3)。



Fig.3 淀みの発見

3. 淀みの効果

淀みはまちに安心と落ち着きを与える。淀みを意図的にすることで各々のスペースができ、その空間は人と人の交流拠点となる (Fig.4)。



Fig.4 交流拠点

4. 床と天井の操作

平らな布の上にもものを並べて、指でその布を押すと押した所がへこみ、ものが滑り落ちる。人も地面がへこんでいけばそこに引き込まれるのではないかと考えた (Fig.5)。



Fig.5 床の操作



Fig.6 天井の操作

5. 淀みがつくる交流拠点

床や天井の操作でできた淀みを日常生活でよく利用されるところにつくることで、その淀み自体が生活の一部になる。そこに、世代を問わず留まることのできる、地域住民のための情報交換の場を提案する (Fig.7,8,9)。



Fig.7 平面図 S=1/1000

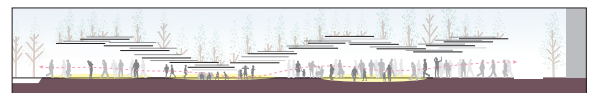


Fig.8 断面図 S=1/500



Fig.9 模型写真